

◆ 今週のコメント

- ・ **デング熱**の報告が1例(女性, 30歳代)あります。推定感染地域は国外(スリランカ)です。デング熱は、熱帯、亜熱帯地方に位置するアジア、アフリカ、中南米などの国々で発生・流行しているウイルス感染症です。ヒトからヒトへの直接的な感染はありませんが、ネッタインシマカ(日本には常在していない)やヒトスジシマカを介して、ヒト-蚊-ヒトという経路で感染します。現在、輸入症例の報告だけですが、今後、持ち込まれたウイルスによる国内感染もあり得ると指摘されています。
流行地にてかける際は、長袖長ズボンを着用したり、忌避剤を使用するなど蚊に刺されないようにすることが必要です。
- ・ **A群溶血性レンサ球菌咽頭炎**の定点当たり報告数は2.46(101例)となり、前週1.90(78例)に比べ約1.3倍に増加しています。第16週(4月14日～4月20日)以降、過去5年平均値を上回る状態が続いており、過去10年間の同時期と比較して最も多い報告数となっています。全国においても、例年より多い状態が続いています。

◆ 今週のトピックス: <ヘルパンギーナ>

ヘルパンギーナの定点当たり報告数は1.66(68例)で、前週 1.17(48例)に比べ約1.4倍に増えています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- ・ 二類: 結核 1例(肺結核 なし, その他結核 1例, 潜在性結核感染者 なし)うち喀痰塗抹陽性 なし
【1月以降の累積報告数 184例(肺結核 91例, その他結核 43例, 潜在性結核感染者 50例)うち喀痰塗抹陽性 43例】
- ・ 四類: **デング熱 1例**【1月以降の累積報告数 2例】
- ・ 五類: **侵襲性肺炎球菌感染症 1例(第24週追加)** 【1月以降の累積報告数 25例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

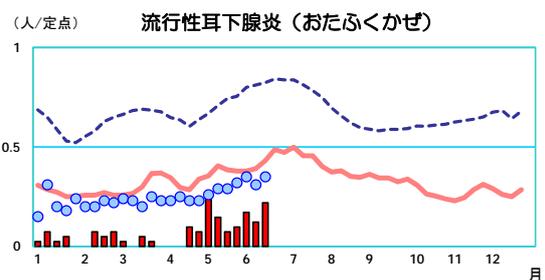
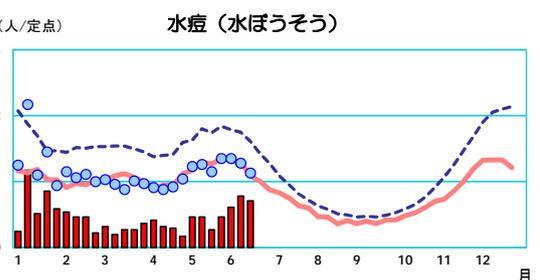
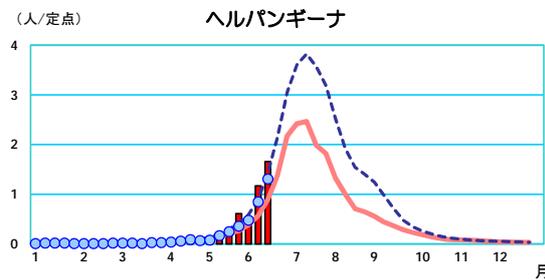
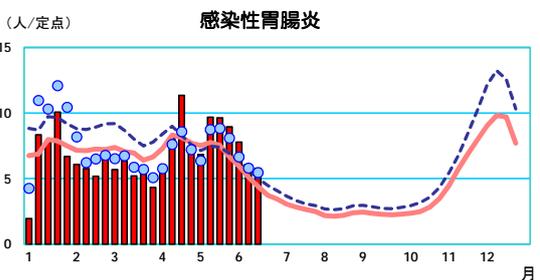
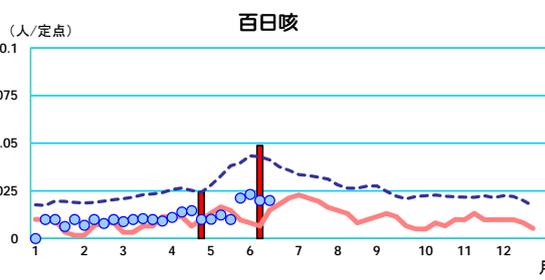
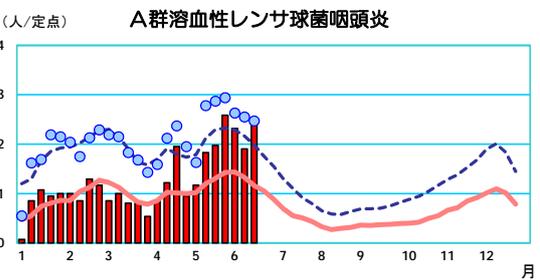
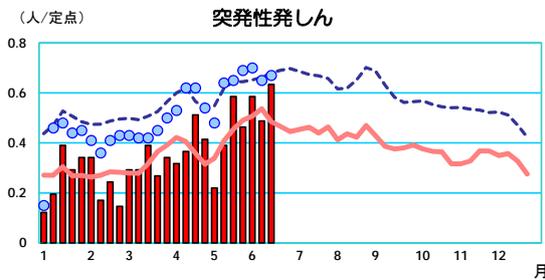
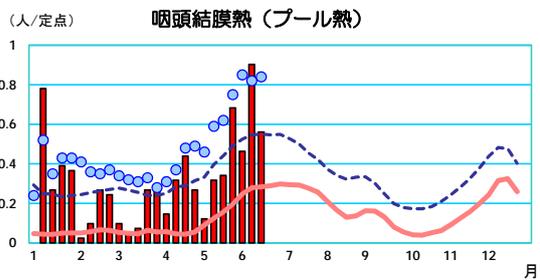
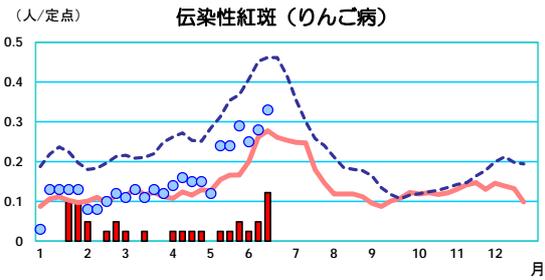
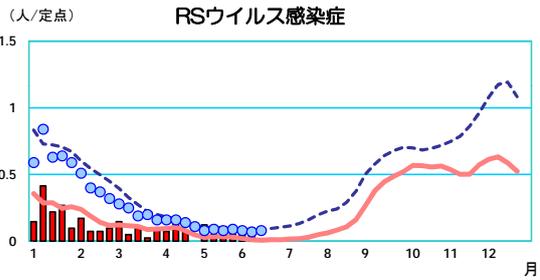
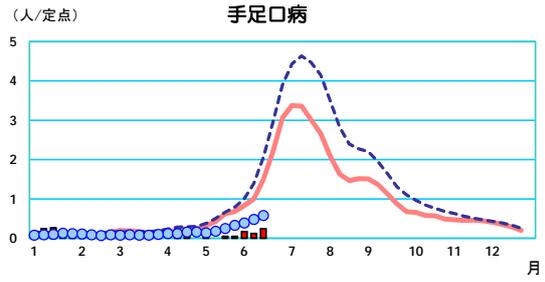
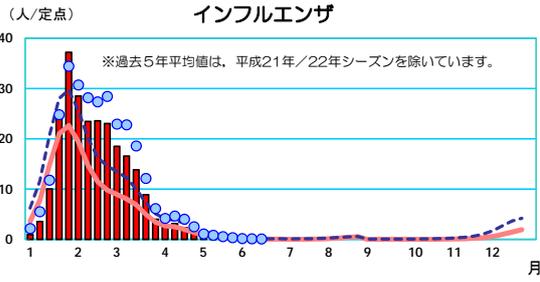
定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ ^a	インフルエンザ	0.00	0
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	5.78	237
	② A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.46	101
	③ ヘルパンギーナ	1.66	68
	④ 水痘	0.71	29
	⑤ 突発性発しん	0.63	26
眼科	流行性角結膜炎	0.60	6

【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <ヘルパンギーナ>

(注) 京都市のデータは、平成26年6月26日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

インフルエンザ及び小児感染症の疾病別推移グラフ（平成26年）



第25週(6月16日～6月22日)トピックス: <ヘルパンギーナ>

ヘルパンギーナの定点当たり報告数は1.66(68例)で、前週 1.17(48例)に比べ約1.4倍になっています。第20週(5月12日～5月18日)以降、6週連続で過去5年平均値を上回る状態が続いており、例年に比べ報告数が多い傾向にあります。ヘルパンギーナは季節性が明確で、毎年7月を中心として6～8月に増加しますので、今後の動向にご注意ください。

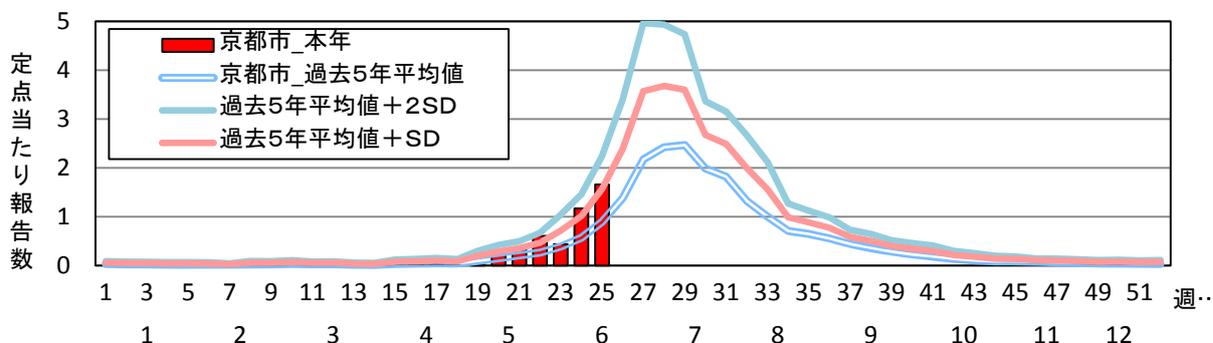
年齢階級別では、1歳が25例(36.8%)で最も多く、次いで2歳 16例(23.5%)、4歳 8例(11.8%)となっており、4歳以下の小児が86.8%を占めています。

都道府県別では、47都道府県中43都道府県で前週より増加しています。西日本で報告数が多く、特に鳥取県(6.05)においては、警報開始基準値(*)『6.0』を超えています。

この疾患は、感染者の鼻汁や咳などの飛沫によって感染したり、便などに排出されたウイルスが手指を介して感染するので、予防にはうがいと十分な手洗いの励行が重要となります。

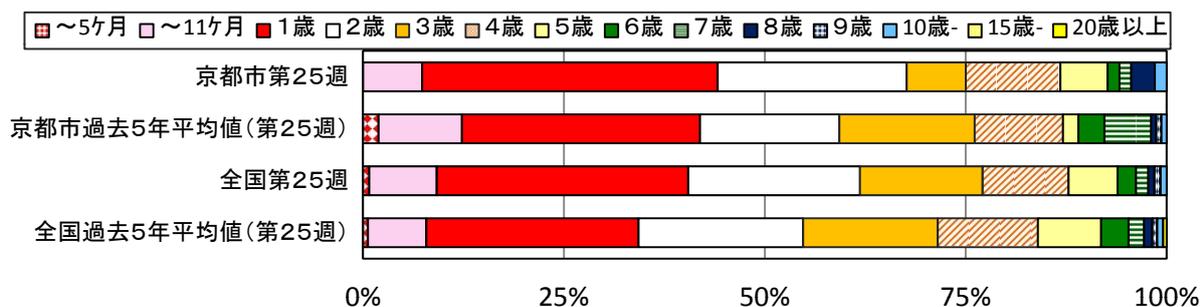
(*)警報開始基準値とは、大きな流行が発生または継続しつつあると疑われることを意味し、国立感染症研究所感染症疫学センターがこれまでの感染症発生動向調査データから基準値を定めています。

本市及び全国の定点当たり報告数の推移



※SDとは標準偏差のことで、データのばらつきを示す尺度です。上のグラフにおいて、赤の棒グラフ(本年の定点あたり報告数)がピンクのライン(過去5年平均値+2SD)を超えているときには、過去5年間と比較してかなり多いことを意味しています。

年齢階級別定点当たり報告数の推移



都道府県別定点当たり報告数の推移

